

英語語法文法学会 第28回大会資料

日時： 2020年10月17日（土）10:00
～10月23日（金）18:00

オンライン開催

<http://segu.sakura.ne.jp>

- 本学会ウェブサイトにて総会資料と発表原稿を掲載するという形で開催します
- ・期間中、総会プログラムと資料を本学会ウェブサイトにて公開します
 - ・アクセスのためのパスワードは同封の書類で通知しています
 - ・質疑応答は同期間中にメール交換で行います
(segu.office@gmail.com)
 - ・その内容を2020年10月24日（土）10:00～10月30日（金）18:00
本学会ウェブサイト（<http://segu.sakura.ne.jp/>）にて公開します
 - ・特段の質問がない場合でも発表が成立したものとみなします

英語語法文法学会

The Society of English Grammar and Usage

September 2020

英語語法文法学会 第 28 回大会プログラム

日 時：2020 年 10 月 17 日（土）10:00～10 月 23 日（金）18:00

本学会ウェブサイトにて総会資料と発表原稿を掲載するという形で開催します

- ・ 期間中、総会プログラムと資料を本学会ウェブサイトにて公開します
- ・ アクセスのためのパスワードは同封の書類で通知しています
- ・ 質疑応答は同期間中にメール交換で行います（segu.office@gmail.com）
- ・ その内容を 2020 年 10 月 24 日（土）10:00～10 月 30 日（金）18:00
本学会ウェブサイト（<http://segu.sakura.ne.jp/>）にて公開します
- ・ 特段の質問がない場合でも発表が成立したものとみなします

大会実行委員：◎出水孝典（委員長）、濱松純司（副委員長）、大室剛志、林龍次郎、
大竹芳夫、五十嵐海理、住吉誠、吉田幸治

総会

開会の辞／学会賞・奨励賞選考報告…………… 会長 中澤和夫（青山学院大学）
事務局報告…………… 事務局長 山本修（大阪市立大学）
会計報告…………… 会計 吉川裕介（京都外国語大学）

ワークショップ

1. 「Worry + that 節の記述的考察」 大野真機（昭和大学）
2. 「grow to be/ verb 構文と grow up to be/ verb 構文はどう違うのか？」
家口美智子（金沢大学）

研究発表

1. 「over-V に生じる非対格自動詞構文」 岩宮努（大阪大学大学院）
2. 「主語名詞（句）を修飾する as 節とその文の特徴
— NP_{subj.} as we know it VP 構文を中心に—」 佐藤嘉晃（京都大学大学院）
3. 「知覚動詞の受動態補文における準動詞の選択制限について」
村岡宗一郎（日本大学大学院）
4. 「「クジラの公式」とは何か—上位構文を含めて再考する」
明日誠一（青山学院大学非常勤）
5. 「現代英語における as ... as possible の振る舞い
—比較表現の重なり as ... as ... as possible—」 松田佑治（立命館大学）

シンポジウム「正しい英文解釈に必要な語法文法知識」は来年度に延期になりました

閉会の辞 山本修（大阪市立大学）

ワークショップ

Worry + that 節の記述的考察

大野真機（昭和大学）

経験者 (Experiencer) を内項として取る心理動詞の多くは、経験者が（表層の）主語として現れるときには過去分詞の形を取って心理状態を表すことが多い。一方、心理動詞の中には、ごく少数ではあるが、worry などのように自動詞化して経験者が主語として現れるものもある。動詞 worry の語法の1つに、worry + that 節の形で概略「that 節以下のことを心配する」の意を表すものがある(e.g., *I worry that she won't be at the airport.*)。That 節を目的語に取っている（ように見える）ことから、この用法での worry は他動詞であり、that 節は文中で名詞節として働いているように思われる。しかしながら大抵の英和辞典や文法辞典は、この用法の worry は自動詞であり、that 節は原因・理由を表す副詞節であると述べる。本発表では、自動詞扱いをすることの背景を考えると「自動詞+副詞節」分析には一定の根拠があるものの、「他動詞+名詞節」分析の可能性は完全には排除されないことを主張する。

grow to be/verb 構文と grow up to be/verb 構文はどう違うのか？

家口美智子（金沢大学）

本発表は、grow to be/verb 構文と grow up to be/verb 構文の差を考察しながら、come/get to という意味で変化を表す grow to の現在の英語における立ち位置と機能を考える。grow to はアスペクトを表す連鎖動詞であるが grow to be/verb は頻度が激減している。grow up to be/verb は2つの意味要素（成長する+その結果・・・になる）から成る結果構文であり漸増し続けている。この傾向は、変化を表す grow の用法（grow+NP 及び grow+AP）の頻度が減っているのと対照的に句動詞 grow up は増え続けているのとの関係があるようだ。変化を表す grow+NP は現在の英語では非文であるとされているせいか、特に grow to be NP の頻度は激減している。文法的な構文として今なお存在しているのは[grow to be NP]という構文が生き残っているためであると考えられる。面白いことに、grow to は COHA で 1940 年代まで raising 型の動詞として there 存在文や形式主語 it とともに使用されていた。しかし、変化の用法が減るにつれてこの用法もほぼ消滅している。一方、「成長して・・・になる」という変化を表す用法（grow up+NP）も現在の英語で非文であるが、grow up to be NP に関して、頻度を伸ばしている。これは結果構文であるため、to 不定詞の部分に現れるものに制約がないためであろうと思われる。

研究発表

over-V に生じる非対格自動詞構文

岩宮努（大阪大学大学院）

本稿では、*over-* を伴う 他動詞の 目的語が主語の項に収まり、*over-V* が非対格自動詞化する 事例（つまり能格文および 中間構文の事例を検討する。

- (1) a. The radiator would likely be destroyed, so **the engine** would **overheat** and stop within a few minutes,...(AU 2017/ Now Corpus)
b. Predictably, railroads disagree, alleging that **trucks continually overload** - ... (Wordbanks)

(1a)は、受動者 *engine* の状態変化が動作主よりも際立ち、自発性をもつと解釈されるために自動詞化する事例だが、(1b)のように付加部を伴えば、通常は自発性をもたないと考えられる事物も、中間構文として *over-V* の自動詞主語になる場合がある。先行研究 では *overeat*, *overbuy* など、目的語が背景化して省略される非能格自動詞としての *over-V* の自動詞化がしばしば論じられてきたが、(1a)の *overheat* や *overgrow* のような能格文、また(1b)の *overload*, *overvalue*, *overfill* など、中間構文としても *over-V* の自動詞化は生じる。本研究は *over-V* という形になることであらわれるこの非対格自動詞の用例を、構文 [NP1 (MOD) *over-V*] ↔ [(Y) (MOD) *V* X₁ *too much*] (X: uncontrollable patient/ Y: non-salient agent) という観点から考察する。

主語名詞（句）を修飾する *as* 節とその文の特徴

—NP_{subj.} *as we know it* VP 構文を中心に—

佐藤 嘉晃（京都大学大学院）

英語の *as* は節と節を関係づける機能に加え、名詞と節を関係づける機能も有している。後者に関して具体的には(1)に示すように、*as* は後続の節を従えて、前の名詞を修飾し、より大きな名詞句を形成している。

- (1) The world *as we know it* will cease to exist. (COCA)

この表現に関して、形式的には上記の特徴に加え、修飾される名詞句に対応するものが *as* 節内に義務的に存在しなければいけない（ここでは *the world* を指す *it*）という特徴をもち、意味的特徴の一つには、*as* 節内の動詞は認識を表す動詞が生起することが多い (cf.八木(1996))。

本発表では、はじめに、(1)のような主語名詞句を修飾する *as* 節に焦点をあて、*as* 節主語や動詞そして主語名詞句の特徴をコーパス調査に基づき、明らかにする。さらに、非常に高頻度で生じる *as* 節動詞 *know* を伴う場合、*as* 節や主語名詞句の特徴にとどまらず、これらを含んだ文が表す事態にまで、顕著な意味的特徴がこの言語表現に密接に結びついていることを示す。

知覚動詞の受動態補文における準動詞の選択制限について

村岡 宗一郎(日本大学大学院)

現代英語における知覚動詞は、過去分詞補文を除き、原形不定詞と現在分詞を補文に取る。その一方で、受動態補文においては、to 不定詞と現在分詞が用いられ、原形不定詞は出現しない。

- (1) a. I *saw him walk* across the road. (江川 (19913: 333))
b. I *saw him walking* across the road. (ibid.)
c. *The dog *was seen cross* the road. (Gisborn (2010: 198))
d. Carl *was seen reading Barriers*. (Miller (2002:253))

しかし、通時的に見れば、受動態補文における原形不定詞の出現 17 世紀末まで散見されるという。

本発表では、通時的に存在が確認されるにも関わらず、知覚動詞受動態補文において、to 不定詞と現在分詞が用いられ、原形不定詞は出現しないのはなぜか、語用論の観点から分析を加え、その要因を明かにする。本発表の主張として、まず知覚動詞の補文に出現する準動詞は、証拠性モダリティを具現化したものであることを提案する。そして、受動態補文における原形不定詞の出現は、証拠性モダリティをかなり強く反映したものであり、受動化により、知覚情報の出所である主語を削除されているのにも関わらず、証拠性モダリティを強く反映されていることから、グライスの協調性の原理(量・質の公理)に反し、語用論的要因により容認されないと主張する。

「クジラの公式」とは何か—上位構文を含めて再考する

明日誠一(青山学院大学非常勤)

クジラの構文は不思議である。实例の分析より理論が先行し、公式化している。自戒を込めて、この構文をクジラの公式と呼ぶ。

クジラの公式の最新研究に廣田(2019)を選び、上位構文にも目を向けて、「クジラの公式」とは何か、事実観察から解明する。

本発表では、廣田(2019)が主張する(1)と(2)を取り上げる。

- (1) 従来の先行研究では、「クジラ構文」の定義が必ずしも明確ではない
(2) No more A than B 構文は、意味論的には、前件と後件の間の「差分がゼロ」であることを言明するのに過ぎない

(1)に対して、クジラの公式は、(あ)「主節と従節の主語の間に類似性がある」ことを表す「アナロジーの構文」である、(い)推論形式が *modus tollens*(後件否定)である、の2点を主張する。

(2)に対して、No more A than B 構文は、(う)no が、意味論的には、‘not’を意味する(= ‘less than or equal to B’ を意味する)、(え)話し手が「Bを基準に+ α があるかどうか」だけを話題にする(= ‘less than’ を引き算する)会話的な含意が生じる)結果、語用論的に「差分がゼロ」の意味が派生する、の2点を主張する。

現代英語における as … as possible の振る舞い
-比較表現の重なり as … as … as possible-

松田 佑治 (立命館大学)

「できるだけ…」を重ねて表現する方法としては、as X and Y as possible のように、等位接続詞 and を用いる方法がある。しかし、以下の(1b)のように、and を用いると、不可となる事例がある。

- (1) a. Lots of people wants to make **as much** money **as quickly as possible**.

多くの人ができるだけ早くできるだけ多くのお金を儲けたいと思っている。

(滝沢 (2006: 152))

- b. *Lots of people wants to make **as much** money **and** quickly **as possible**.

本発表の目的は、as X and Y as possible ではなく、as X as Y as possible のように、as を重ねる事例・作例を提示し、インフォーマント調査(7名)に基づいて、その揺れと限界を分析することである。

- (2) In the truest spirit of a global brand, Donald Trump has mastered the art of being **as many** things to **as many** people **as possible**. (The Washington Post 電子版)

- (3) Be **as** kind to **as many** elderly people **as possible**.

- (4) OK/? You should try to make **as many** people **as happy as possible**.

(2名 OK/5名?)

- (5) *Our mission is to provide **as many as** good journalism classes **as possible**.

英語語法文法学会役員

名誉顧問	八木克正	安井 泉	内田聖二	
会長	中澤和夫			
事務局長	山本 修			
会計	吉川裕介			
会計監査委員	前川貴史			
運営委員	五十嵐海理	梅咲敦子	大竹芳夫	大室剛志
	金澤俊吾	吉良文孝	住吉 誠	出水孝典
	中澤和夫	西脇幸太	濱松純司	林龍次郎
	前川貴史	山本 修	吉田幸治	
編集委員	吉良文孝 (編集委員長)			
	牛江一裕	大竹芳夫	大橋 浩	大室剛志
	金澤俊吾	吉良文孝	澤田茂保	滝沢直宏
	中澤和夫	中山 仁	西田光一	林龍次郎
	松村瑞子	家口美智子	山岡 洋	吉田幸治

発行日 2020年9月17日

編集・発行 英語語法文法学会
代表者 中澤和夫
事務局 〒558-8585 大阪府大阪市住吉区杉本 3-3-138
大阪市立大学英語教育開発センター 山本修 研究室内
Tel.: 06-6605-3587 (研究室)
Fax: 06-6605-3428 (共同研究室)
Email: segu.office@gmail.com
URL: <http://segu.sakura.ne.jp>
振替口座 02260-0-70393 英語語法文法学会
© 英語語法文法学会
